本学の器楽指導について

平　澤　節　子
Hirasawa　Setsuko

Ⅰ．はじめに

本学、上田女子短期大学幼児教育学科では、幼児・保育コース及び社会・心理コースの学生に向けた保育現場中心型の内容と、芸術コース（音楽）学生に向けたクラシック・ピアノ演奏に特化した内容と、大きく 2 つに分けた器楽指導を行っている。コースは 3 種に分れているものの、いずれも幼児教育学科学生として、在学の 2 年間で幼稚園教諭 2 種免許状と保育士資格の取得を目指すことに変わりはない。つまり本学幼児教育学科に入学した学生は保育者になるという前提で、カリキュラム上一年次前期履修の「器楽ⅠA」、及び一年次後期履修の「器楽ⅡA」を必修科目として修めることが義務付けられている。保育現場では、生活の柱となる朝・昼・お帰りの場面では歌が欠かせず、その他にも合奏や音楽劇等、音楽に触れる機会が多い。これら音楽活動は、保育・教育の 5 領域である「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」全てにまたがるところであり、幼少期に音楽に親しむことのメリットは非常に大きい。従って保育者には、幼児の音楽活動を円滑に運ぶだけの演奏力と指導力とが求められてくるのである。本稿では、本学における器楽指導を振り返りながら課題を検討し、今後更に充実した指導の在り方を探っていきたい。

Ⅱ．習熟度別器楽指導について

幼児教育学科では芸術コース（音楽）を除く学生を対象に、器楽ⅠA 及び器楽ⅡA を開講している。いずれも ML（ミュージック・ラボラトリー）を利用した器楽（ピアノ）演習で、1 クラス 20 数名ずつの一斉指導を実施している。学生のピアノ学習経験の有無を含め、ピアノ演奏技術の個人差は大きく、「器楽」演習の一斉指導は非常に難しい。そこで本学では 5 年ほど前より「習熟度別クラス編成」による指導に力を入れている。授業は時間

割上 1 学年を A～C までの 3 クラスに分けて行われているが、「器楽」に関してはそれをさらに細分化し、1 クラスを「初心者クラス」（以後「初心者」）、「経験者クラス」（以後「経験者」）の 2 つに、つまり 1 学年を 6 クラスに分けた指導を行っている。授業は担当教員のほかにティーチング・アシスタント（TA）を 1 ないし 2 名を配し、一斉指導の中でも学生一人ひとりに対応できる体制を整えている。クラス分けは、入学前に新入生を対象に開かれるプレ・オリエンテーション時に、「ピアノ学習歴調査」と「ピアノ経験度調査」により行われる。前者は、本人の希望やピアノ学習年数、読譜力等を問う質問紙による調査で、後者はピアノを実際に弾いて判断するものである。「ピアノ経験度調査」の方法は、3 種の楽譜を提示し自ら選んだ曲を 10 分程度練習し、その後に演奏技量をみるものである。提示する曲は、左右の手、共にト音記号譜によるほぼ 5 指ポジションで弾ける曲（①）、大譜表による 5 指ポジションの曲（②）、同じく大譜表で 16 分音符のアルベルティ・バスによる伴奏と 1 オクターヴのスケールを要する曲（③）の 3 つである。①を選曲する者はヘ音記号が読めない学生である為ピアノの基礎訓練が初歩段階、または全くの未経験者であることが多い。また②を選曲する者は、多少の基礎訓練が済んでおり、ヘ音記号とト音記号の読み分けが出来る学生である。③を選曲する者は、幼少よりピアノ学習経験があり、読譜やリズムの理解があり経験者であることを示している。つまり①は初心者で、③は経験者の目安になるわけだが、②に関しては読譜力とは別に、5 指が分離されスムーズな動きを見せる学生は「経験者」に、逆に手がこわばりぎこちない動きを見せる学生は「初心者」にと、手の構えや手指の動きで判断している。

ただ本学の場合、入試にピアノ実技試験が無いことや、近年では初心者対応の指導を掲げている事もあり、入学生に占める初心者の割合が非常に大きい。1 クラスを「初心者」と「経験者」に分けるものの、ML 教室に設置されるピアノ台数の関係もあり、初心者の人数が 1 クラスに収まらず、「経験者」に入らざるを得ない学生もいる。その場合は、担当教員や TA がその旨を把握しながら指導し、学期が変わるごとにクラスの変更など柔軟に対応するようにしている。授業で使用される教材についても、同一の曲を「初心者」では簡易譜で取り組み、「経験者」ではテキストどおりに弾くなど指導内容についても緩急をつけている。指導方法においても、「初心者」では読譜指導や基礎トレーニングに時間をかけるが、「経験者」では、子どもの曲以外のピアノ曲に取り組むなど応用的な内容となっている。しかしながら、このような習熟度別の指導を行うものの、授業が進むにつれて、同じクラス内でもピアノ技術の習得度に個人差が生じてくる。その為毎月行われる器楽担当

者会議では、各クラスの進度を確認し担当教員が直面する問題を会議全体で把握し、指導方法や学生対応について協議している。授業は前・後期で開講枠が異なる為、それに伴い担当教員も変わる。学期が始まる毎に当会議では引き継ぎ会を開き、学生個々のレベルや取り組み姿勢等を次期担当者に伝え、円滑な授業運営が出来るよう考慮している。１人の学生を 2 年間で複数の教員が関わる事で、指導者により異なる多様なピアノ指導法に触れる機会となり、学生にとって非常に有益であると考えている。

Ⅲ．保育者に求められる演奏力とは

本節では、保育者養成課程にて求められるピアノ演奏力について考えてみようと思う。幼稚園や保育園の就職試験ではピアノ実技が課されることが多く、子どもの歌の弾き歌いやピアノ曲、初見などが一般的である。子どもの歌の弾き歌いでは、「犬のおまわりさん」「おもちゃのチャチャチャ」「小さな世界」などの定番曲から、「真っ赤な秋」「きのこ」など試験の季節に合わせた曲など、保育現場で馴染みの歌が選曲される事が多い。保育士養成協議会による保育士試験においても、二次実技試験として（選択ではあるが)、子どもの歌の弾き歌いが課されている。平成 23 年度は「思い出のアルバム」と「雨ふりくまのこ」、平成 24 年度は「大きなたいこ」と「おんまはみんな」が出題されている。この弾き歌いという課題は、ただピアノを弾くだけでなく、歌を同時に歌わなければならない。適正なテンポで、しかも保育室に響くだけの声量で歌詞を明確に、そして表情豊かに歌わなければならない。子どもの歌の演奏自体はさほど難易ではないが、演奏力・歌唱力・表現力の総合的なバランスが重視されるのである。学生の中には、ピアノの演奏は長けているものの声が小さい者、逆にピアノは苦手でテンポも遅いが歌唱力に長けた者など、学生個々に特性があり、学生一人ひとりを見極め、長所を活かし不得手とする部分を補うための指導が重要となってくる。

ピアノ曲に関しては、『自由曲（ソナチネ程度)』と提示される事が多く、保育者養成課程での学習も、もちろんそれ以上のレベルに達することが望ましいのであるが、“ソナチネ程度”がひとつの目安となっている。では、『ソナチネ』について少し考えてみたいと思う。そもそもソナチネとは、形式的に小規模なソナタ（小さなソナタ）を表わすイタリア語で、18 世紀後期クレメンティやクーラウ、ディアベッリなどの作曲家が多く作品を残しており、ピアノ教材としても馴染み深いものである。このソナチネは、ピアノ学習者がバイエル等のピアノ導入教材を始め、バイエル終了後ブルグミュラー25 の練習曲を経て到達するのが

ソナチネである。[i]　早い者であれば学習を始めて数年で、つまり小学校中学年から高学年で到達できるレベルなのである。

初見とは、試験当日会場で曲が提示され、数分の予見（または練習）の後にピアノを演奏するもので、就職試験に課す園が増えてきている。ピアノ初心者も予め準備をしていれば課題曲を流暢に弾くことが出来るが、この初見は、読譜力をはじめ、楽譜を目で追いながら音符の動きを瞬時に手の動きに変換させて演奏しなければならないため、ピアノ学習経験が一定以上ないと非常に難しい課題である。保育現場でも、ピアノが弾けるか苦手かの判断が容易である為、初見を実施する園が増えてきているのも頷けるのである。つまり保育者養成校におけるピアノ学習の目安としては、１、子どもの歌の弾き歌いが出来ること。2、ソナチネ程度のピアノ曲が弾けること。3、読譜力を身につけ、簡単な楽曲の初見演奏が出来ること。基本的には、この 3 点でないかと考えるのである。本学の器楽授業では、子どもの歌とピアノ曲の指導に関しては、先に述べたとおり初心者を多く受け入れている現状の中、学生に基礎レベル以上の力をつける指導を行っている自負はあるものの、初見指導に関しては課題があるように思われる。学生個々に読譜力･演奏力の差は著しく、一斉指導が容易ではない。従って個人指導が望ましいのであるが、限られた時間内では初見の手順を示すのが精一杯である。本学では二年次に履修する器楽Ⅲ、器楽Ⅳの個人レッスンの時間を利用して初見指導が行われているが、担当教員からは時間の少なさが指摘されているところである。この点については、半期 15 回の指導の内数回を初見の指導に特化するなど、授業内容の工夫で改善できる為、今後指導方法を確立していきたい。

Ⅳ．特色ある芸術コース（音楽）を目指して

本学幼児教育学科には芸術コース（音楽）があり、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格の取得を目指しながら、同時にクラシック音楽（ピアノと声楽）を本格的に学ぶことのできるコースとして広く知られている。学生はピアノ専攻または声楽専攻のどちらかに分かれ、主専攻 45 分、副専攻 30 分といった具合にピアノと声楽両方の個人レッスンを受けることができる。ピアノはツェルニーやモシュコフスキーの練習曲や各調性のスケール等のテクニックや、バッハのインヴェンションやシンフォニアで多声奏法の基礎、そして古典派ソナタからロマン派、近現代楽曲に及ぶまで、2 年間を通して様々な時代様式とその演奏法を学んでいくのである。声楽に関してもコールユーブンゲンやコンコーネで発声の基礎から、イタリア歌曲、日本歌曲、ドイツ歌曲、オペラのアリアやミュージカルの楽曲、

またソロ曲に留まらず重唱に至るまで幅広いレパートリーの獲得を目指している。両専攻とも実技以外にも、楽典や和声法の音楽理論やソルフェージュの授業など、音楽を専門的に学ぶ為のカリキュラムが整備されているのである。

授業以外には、オープンキャンパスでのオープニング演奏やミニコンサート、学海祭における「音楽コース秋のコンサート」、幼児教育学科主催「新春コンサート」など学内での発表の場が用意され、学生が目指す憧れのステージとなっている。やはり演奏等の実技科目では、人前で発表するという実践経験が非常に重要になってくる。通常のレッスンでは楽譜を正確に弾き、その楽曲の書かれた時代様式による演奏法を習得し、作曲家の意図する表現を実際の音として演奏することを目指しているが、人前で演奏する事を想定して仕上げるとなると少し異なってくる。まず暗譜をして、楽譜なしに楽曲を最後まで完成度を持って弾けることが大前提となってくる。練習が未熟のままでは、演奏の途中で次の音が思い出されなかったり、何度もミスを連続したりと不完全な演奏に留まるが、時間を費やし暗譜を深めることで、頭の中で楽譜や楽曲の進行を再構築出来るようになり、弾き込むことでテクニックも安定し、演奏も熟してくるのである。ただ、人前で演奏するということは、緊張等精神面に左右される事が非常に多く、日常の修練で解決できないこともある。であるからこそ、実践経験をとおして日々の練習がいかに大切であるかを学ぶことが出来るのである。緊張状態の中で自分の精神と向き合い、普段どおりのパフォーマンスを心がけるという点ではアスリートと同じで、学生のレベルではあるがステージに立つことで、ピアノを弾く以上の多くを学んでいるのである。

幼児教育学科の芸術コース（音楽）で学ぶことのメリットは、習得した音楽知識と技術が保育現場での仕事に直結しており、その能力を大いに発揮する事が出来ることである。特に就職試験（実技）では他者に勝る大きな武器になるといっても過言ではない。卒業生の多くは得意の音楽を活かし保育者として活躍しており、近隣には本コースの学生を採用に望む園もあるほどである。また卒業生のなかには更に研究生として在籍し、ピアノや声楽の研鑽を積み、演奏家としてまた音楽講師として活躍する者も多く、本コースの指導成果の賜物である。

本学は今年で創立 40 周年を迎えるが、今までに培った本コースの伝統に加え、更に新しく有能な人材の育成に努めていきたいと思う。学内には音楽ホールとしての設備を有する北野講堂があり学修環境にも恵まれている。これを活かしながら、学生には更にステージに立つ機会を与え、演奏パフォーマンスを高めながら向上心を養っていきたい。また、

対外的な知名度を上げるため学外における活動にも力を入れたい。今までにも本コース生による地元の公民館活動への出演やボランティア活動、また講師陣によるコンサート等があるが、今後も学内に留まらず地元や県内に活動の枠を拡げていきたいと考えている。

Ⅴ．おわりに

音楽を学ぶということは、ピアノや声楽の演奏力に限らず、楽譜の読み書きを始めとした楽典やソルフェージュ等の実践力と理論をバランスよく習得し、そして学ぶものが表現者としての自覚と自らの感性を磨くことが重要になってくる。なぜならば、保育者は子どもたちにとっていちばん身近な音楽家といっても過言ではないからである。本学のように、ピアノ初心者が多く、在学期間が 2 年という制約がある中で、なかなか学生が気持ちにゆとりを持って音楽を学べる環境でないことは承知しているが、音楽に対する感性、つまり音楽に込められた様々な感情や性格を感じ取り、それに共感できる保育者になってほしいと願っている。授業では、2 年間を通じて取り組む課題曲を一覧にした「達成表」を用いているが、課題を 1 曲ずつクリアすることで達成感を与え、ピアノが弾けるようになった喜びを学生と共有しながら、音楽を味わう心情にまで目を行き届かせた指導が重要である。子どもの豊かな情操教育のための音楽活動を行うためには、学生自身が音楽を楽しむ素養を身につけなければならないからである。保育現場で歌われる子どもの歌は、日々の生活を綴ったもの、季節や自然環境をテーマにしたもの、日本の伝統行事を歌ったものなど奥が深い。従って学生には保育現場における音楽の重要性と役割について考え、幼児教育学科でピアノを学ぶ意義を明確にする必要がある。

「器楽ⅠA」「器楽ⅡA」の資格取得に関する必修科目では、一度不可の成績が付いた学生にも「再履修クラス」で学ぶ機会を与え、在学の 2 年間で単位取得できるよう配慮されている。これに平成 24 年度後期より、授業とは別に「補習」の開講が学内で認められた。一斉指導で大勢の中から徐々にクラスのペースから遅れてしまう学生についても、「再履修クラス」に入る前に「補習」を利用することで、練習の進め方や読譜力を習得し、クラス授業に取り遅れることなく、ピアノ技術の向上に繋がればと期待している。ピアノの技術を習得する為には、古今東西個人教授に依るところが一般的であるが、授業という枠内での器楽指導では、学生個々への指導を行き届かせる事が必要であり、今後さらに指導システムを検討し柔軟に対応していきたいと考える。

【参考文献】

下中弘編　音楽大辞典第 3 巻　平凡社　　1982 年 4 月

【註】

[i] ただし昨今ではピアノ初歩教材が多種多様になり、先に示した古典派中心の学習より、西洋音楽の 4 期（バロック・古典・ロマン・近現代）を広く学習することが一般的であることを付け加えておく。